

フィンランド・メソッド

◇ 現在我が国では、「全国学力・学習状況調査」が4月に行われています。この調査が始まるきっかけになったのが、OECD（経済協力開発機構）で行われている PISA 調査というものです。これは、OECD 加盟国の多くで義務教育の終了段階にある 15 歳の生徒を対象に、読解力、数学知識、科学知識、問題解決を調査するものです。国際比較により教育方法を改善し標準化する観点から、生徒の成績を研究することを目的としています。この調査（2003 年実施）で日本の読解力が 41 カ国中 14 位だったことをマスコミが取り上げ、「ゆとり」撤廃につながり、「全国学テ」が始まったというわけです。

◇ この PISA 調査（2003 年実施）で一位となったがフィンランドでした。この頃から、にわかには、フィンランドの教育が世界的に注目され始めました。PISA 調査が、義務教育の終わり間近のどれくらいの学生が社会への完全な参加にとって不可欠である知識と技術のいくらかを得たかについて判断するものだといわれるものですから、余計に注目を浴びたのでしょう。日本でも、類に漏れず、フィンランドの教育を研究した書籍が数多く出版されました。私が読んだ関連する著書から、特徴的なものを紹介してみようと思います。

◇ フィンランドでは、今の教育に至るまで、約 10 年の歳月をかけて教育改革を行ったと書かれています。その基本は、「**先生が教え、生徒が学ぶといった受け身の学習から生徒自らが学ぶという方向に転換**」したのだそうです。

それでは、フィンランド教育の特徴的な部分を見ていきましょう。

* 「教育には優秀な教師が必要である」という考えのもと、教師の質を高めることが第一に考えられる。例えば、採用されて**3年間は担任をもつことはなく、インターンシップ**という形で研修を受けることになっている。

* 1 クラスの子どもの数は、**24人**まで。

* **教師の仕事は授業をすること**。生活上の問題はソーシャルワーカーやカウンセラーが担当。

* **年間授業時数は555時間**（ちなみに日本の6年生の年間授業時数は945時間だったかな？）。

* 教育の特徴は**グループ学習**にある。分かる子どもが分からない子どもに教えるシステム。

* **一人たりとも落ちこぼれはつくらない**という姿勢が貫かれている。

* **自主学習をする習慣**を身につけさせる。先生が教えるのではなく、子どもたちが自学自習をし、子どもが家庭で学習してきた成果を互いにディスカッションし、理解できなかった部分を質問し、分かる子どもが教え、指導するというシステム。

* フィンランドの国語教育は、**文章を読むための技術、議論をするための技術、プレゼンター**

ションのための技術などを教えることが中心となっている。

*フィンランドの国語では①**発想力**(テーマから自由にイメージする) ②**論理力**(発想したことを整理する) ③**表現力**(自分の考えを表現する) ④**批判的思考力** ⑤**コミュニケーション力**の5つの段階に分けて指導される。

***発想力・思考力を育てる授業が重視**されている。思考力とは「再生的思考(学んだことを思い出す記憶力)」「生産的思考(新しいことを考え出す創造力)」とされ、そのために、次のような方法がとられている。

・**マインドマップ思考法**…マインドマップを使って考える訓練をさせる。

・**シナプストレーニング**…いろいろな方法で、連想させることに組みこませる。テーマから自由に発想させたことを発表させ、どんどん発言させることを習慣づける。そのことで考えたことを表現することに戸惑いをなくす。

取り立てて行う方法として、連想した言葉を使ってストーリーや詩を書かせる**ストーリー作文**、ある物の**使用法を自由に考えさせる方法**、**2つのものをつなぎ合わせて別のものをつくるトレーニング**など

***論理力を鍛える授業**を行う…論理力とは、「話の筋道を立てること」「物事を関連づけること」とされていて、そういう力を育てるようにしている。

論理的に考えるのに大切なのは、「自分の意見を述べること」と「そう考える根拠を示すこと」とし、子どもが何か意見を言えば、先生は「どうしてそう考えたの？」と聞く。これを繰り返すことで、なぜ自分がそう考えたのか、どういう根拠でその考えに至ったのか改めて考えることになる。そして、短絡的に思いつきで話すことが徹底して排除される。

七田式フィンランド・メソッドで「頭のよい子」が育つ本(七田眞著)ほか

◇ 授業時数がものすごく少なかったり、一学級の児童数が24人までだったりなど、教育のシステム的なものには驚くことばかりです。こういうところも日本で真似ができればいいのですが、日本の予算では難しいのかも知れません(ちなみに、フィンランドの消費税は25%で、その財源が教育・福祉・医療に充てられています)。しかし、後半に紹介した部分が、フィンランドが教育の中核に据えている「論理力を鍛えるスキル学習」なのです。この教育の考え方については、十分に取り入れられそうだと思いますか。つまり、フィンランドでは、授業はもちろんですが、それ以外の部分で徹底したスキル学習をやっているわけです。このようにして、論理力を発揮できるスキルを子どもたちのものにしていっているということです。

◇ フィンランド・メソッドについて、ベネッセのHPに元ヘルシンキ大学附属小学校教師のメルヴィ・バレ氏がかかれたものが紹介されていました。

*フィンランドでは、**読解の要点**として、まず3つのことを大事にしています。

① すべての学習の基礎となるように、きちんと**テキストを読みこなす力**をつけること。

② **批判的に物事を判断する力**を身につけること。

③ **問題解決能力**を身につけること。

この3つの力を育てるために、まず行うのは「**事実**」と「**意見**」の**区別を子どもに教えること**です。批判的な読みをするにしても、問題解決をするにしても、ここが出発点になりますし、

子どもが未来の社会で生きていく上でも一番重要な力になると思います。テレビ、新聞、雑誌、インターネットが発する溢れんばかりの情報の中から、何が真実なのかを見極められなければ、今後の社会では通用しません。フィンランドでは、小学校段階からこの点を意識して教育を行っています。

*次に、**生活体験や現実感覚に基づいてものを考える力**を養うことを大事にしています。私たちがすべきことは、機械的に答えを出す術を教えることではなく、一度出した答えに対しても「なぜそう考えたのか」「その答えは現実的なのか」と、自らに問いかける力を育てることです。そのため、フィンランドでは、「なぜ」「どうして」を繰り返す**授業**を重視しています。

*かつてのフィンランドの教育は、今考えると恥ずかしいくらい画一的な方法で行われていました。「みんなで教科書をきちんと持ちましょう」、「先生が示したところを順番に読みましょう」、「何が書いてあったかわかった人は手を挙げて」という授業では、子どもはどのように答えれば先生が満足するのかわかり、それに沿って覚えていることを口に出しているだけなのではないか——。要は、**子どもが全く頭を使わない授業**になってしまっていたのです。だからこそ、この教え方ではだめだと思い「教え方の改革をしなければ」と強く思ったのです。実際、フィンランドの学習指導要領では、「何をどのように学ぶか」が**最大の問題**であり、量をこなすことが問題ではないという点を強調しています。勉強の進め方に沿ってというなら、まずは「どのように学ぶか」を教え、その次に「どのように問題を解決するのか」という**方法**と、**実際にそれを使うこと**を教えます。あくまでもこの2つが重要で、知識を身につけるのはその次の段階です。これが、「Leaning to learn」という考え方です。

*以前、関西地区を中心に日本の学校を訪問しましたが、「なんとかして教育を良くしたい」と先生方が真剣に考えていること、そして新しい教育方法を熱心に学ぼうとする先生が大勢いらっしゃることに驚きました。こんなに強い思いは、世界中どこでも感じたことはありません。ただ、授業をいくつか見るうちに「なぜ今この活動をしているのか」ということを深く突き詰めて進む授業も多いことに気がつきました。例えば、**子どもを静かにさせるのはとても上手なのに、静かにさせるだけで終わってしまい、肝心の子どもが全く頭を使っていない授業**が見受けられました。

◇ バレ氏が書かれていたことをできるだけそのままの形で紹介しました。最後に、バレ氏は、日本の先生方へ次のようなメッセージを残されています。

日本の先生方が「素晴らしい教育をしたい」という思いを子どもの力に変えていくためには、明確な目的と「具体的にどうすればよいのか」という手立てを持っていることが大切です。経験を集約し、合理的なメソッドとして洗練させていくことで、今後、日本の先生方の熱心な力を最大限に生かしていくことができると期待しています。

フィンランド・メソッドから学ぶべき点が多々あるように感じました。可能なところから取り入れてみませんか。

文責：スギタ